

3. だろだろまいりにみる歴史的風致

(1) はじめに

「あつ、来なされた。」

お接待をしようと待ち構えていた人々が立ち上がった。ここは、本町の三ヶ敷集落にある小高い丘の小さな札所。時は春、4月17日の正午のこと。

足早に白装束の団が姿を現した。先頭の女性は弘法大師の像が入った四角の箱を首から下げ、その後ろの方は明治四国巡拝の文字が書かれたエンジ色の旗を掲げている。

だろだろまいりとは、霊場札所を巡拝することである。本町には隣の鳥栖市、一部は福岡県筑紫野市にまたがって四つの霊場が残り、この明治四国巡拝は、その中のひとつで、春秋に基山―鳥栖内の札所を5日間かけて巡拝するものである。在家信仰集団によって行われ、宗派を問わずに誰でもが参加でき、巡拝者がぞろぞろ歩く姿から「だろだろまいり」と呼ばれ出したといわれている。

(2) だろだろまいりにみる歴史的風致

だろだろまいりにみる歴史的風致は、下表のように示される。

	建造物と町並み	営み
だろだろまいりにみる歴史的風致	●だろだろまいりにみる歴史的風致に関わる建造物と町並み ・霊場を構成する寺社・祠 ・だろだろまいりにみる町並み	●だろだろまいり ・だろだろまいりの歴史 ・だろだろまいり

①だろだろまいりにみる歴史的風致に関わる建造物と町並み

だろだろまいりの霊場である寺社・祠は、旧基肄養父郡の中に散在し、町内にある霊場は129ヶ所に及んでいる。【資料編参照】

ア) 霊場を構成する寺社・祠

霊場を構成する個々の寺社・祠については本計画書の資料編に表として示した通りである。その多くが、近年の現代的意匠での修理が行われ、一部には統一的な木造建築による改築が見受けられる。しかし、その中で、集落や個人の努力によって維持管理され、造立後50年を経過したものもあり、だろだろまいりにみる歴史的風致を語る上で貴重な存在となっている。50年以上経過したものについて詳述する。

【古四国1番札所】

本町の宮浦の瀧光徳寺境内に所在し、石段を造り、基壇の上に木造入母屋造り、平入りの堂舎が建てられている。内部には祭壇が設けられ、釈迦如来などが安置されている。建築年は定かではないが、昭和36年(1961)5月3日の修理記録が堂舎内に置かれている。

【古四国5番札所】

基山南西麓に位置する南谷にある、木造切妻屋根を持つ昭和32年(1957)建築の祠である。正面、側面上部は吹き抜けになっており、開放的な構造を有している。

【古四国14番札所 弁財天】

大興善寺へ向かう道の北側にある石製祠で、花崗岩製の単独神殿内に弁財天をお祀りする。神殿外側側壁に「天明五年(1785)乙巳四月吉日」と線刻され、昭和11年(1936)6月に修理された記録が残る。

【古四国83番札所 丸林住吉神社】

本町北部に位置する特別史跡基肄城跡南水門に接して造立されている石製単独神殿で、住吉神社として鳥居扁額に記され、地域の人々に住吉さんと呼称されている。石製神殿外側に、「天明4申辰年(1784)3月」と線刻され、造立年代を知ることができる。神殿内部には、御幣が置かれており、御神体の姿を確認することが困難である。

【明治四国巡拝 宮脇(古四国44番札所)】

基山南麓の宮浦地区で荒穂神社の北東側に隣接する場所に所在している。石製祠には昭和42年(1967)4月吉日に所在地周辺の人々により建立されたことが線刻されている。装飾された石製扉の神殿内には、祈願の文字が書かれた手作りの前掛けを掛けられた石製の薬師如来座像が安置されている。

【明治四国巡拝 鎮西隈①(古四国39番札所)】

園部の鎮西隈地区に所在する。屋根部は切妻の棧瓦葺きで裏側よりも正面側の軒が若干短く造られている。天井の梁部下面には昭和35年9月吉日に建造されたことが墨書されている。また、平成16年には、所在地である鎮西隈組合の人々により改修されたことが記された棟札が掛けられている。本尊は、木製の観世音菩薩で、この脇には3体の石造仏が安置されている。



写真 1番札所



写真 5番札所



写真 14番札所



写真 83番札所



写真 宮脇



写真 鎮西隈①

イ) だろだろまいりにみる町並み

旧基肄養父両郡を主な霊場巡り範囲とするだろだろまいりは、市街化が顕著な鳥栖市から、都市的な景観と農村的景観の双方を有する町内を歩く。

かつて農村空間がまさっていた頃の旧基肄養父両郡では、春は田植え前、秋は稲刈り前の水田空間を歩くことが一般的であった。その大部分は、江戸時代に描かれた『元禄絵図』に記された道と重なる。長崎街道沿いに造られた白坂の町並みや江戸時代から続く商業空間の木山口町の町並み、三ヶ敷付近の田園地帯、長野の町並み周辺などの農村空間の中を各々の気持ちを込めて歩いている。



写真 白坂の町並み



写真 木山口町の町並み



写真 三ヶ敷付近の田園



写真 長野の町並み

②どろどろまいり

ア) どろどろまいりの歴史

【きやぶ天保八十八ヶ所巡り】

きやぶ天保八十八ヶ所巡りは、今から約180年前の天保4年(1833)に四国八十八ヶ所のミニ版として起こされた。このことは一番札所の釈迦如来像(鳥栖市の徳昌寺内)の台座に次のように刻まれている。

「靈山寺ハ阿笏板野郡竺和山一乗院庵を始として八十八番其地の砂をもて此下に埋むこと ■■■兵衛建政 長城九郎直治 ■■■良治敬明 権藤利八 右之四人志合せ年来の志願 成就に到る信仰の輩此八十八ヶ所廻り給ハ四国巡拝も同前仏徳広大の慈悲なれハ現当二世■利益少なからず」(四国八十八ヶ所の砂を持ってきてこの地に埋め、発起人4人が志を合わせ長年の志願成就に到る。信仰する人がこの八十八ヶ所を廻るならば、四国巡拝したのと同じように広大な慈悲を持って仏徳を得られるでしょう。)

なお、「きやぶ」とは、本町と鳥栖市の一部が江戸時代には対馬藩田代領で、当時の地名、基肄郡養父郡をくっつけて『基肄養父』と呼ばれていたことから名付けられた。

札所は、本町と鳥栖市にまたがって点在しており、四国八十八ヶ所のようにお寺自体が札所となっているわけではなく、小さな仏像がその役目を果たしている。一番を除いて二番以下はほぼ同じ大きさと造形で、光背の右に札所番数、左に寺名、真ん中に本尊名があり、台座に「天保四癸巳年」の文字と施主名が刻まれているのが特徴である。

※文中の■：判読不明文字

【観音霊場三十三ヶ所巡り】

成り立ちは、田代代官所の業務日誌をまとめた古文書のひとつである『^{こうかん}考鑑』の元文5年(1740)の記載にあるように、始めは太田山安生寺(打ち納め33番札所)に観世音三十三体を本尊とする観音堂を建立し、ここ一ヶ所で三十三ヶ所をお参りしたことに代えようとしていたが、実際はきやぶ領内に札所は広がり、観音霊場三十三ヶ所巡りは少なくともその頃には始まっていたと考えられる。札所には、新たに観音様を安置したのではなく、それまでにきやぶ領内にあった観音堂を結び付け観音霊場をつくったとされる。それは、その造形から室町時代後期の作と考えられている25番清水観音、養老元年(717)に作られたと言い伝えられる4番大興善寺の十一面観音というように、つくられた時期が異なる仏が祀られていることから分かる。つまり、一ヶ所で巡拝を納めようとしていたが、領内の既存の観音様を33ヶ所の札所と定めて霊場と成したものと考えられている。また、^{きざん}基山の麓から、大興善寺に至る古道には明治25年(1852)建立の「左小松山観世音道」と記された追分石や、園部宝満神社前を通る道筋にも観音霊場の一つである大興善寺への追分石として、皮籠石集落の入り口に建つ明治4年(1871)銘がある「北小松、南田代道」と記す六地藏尊の石柱や、「小松観世音道」と記す石柱が建てられている。



写真 六地藏尊の石柱



写真 道標の石柱

【古四国八十八ヶ所霊場】

^{きざん}基山の中腹にある瀧光徳寺が大正元年(1912)に開いた古四国八十八ヶ所霊場で、^{きざん}基山山頂から町内に札所が点在している。

本町に本山がある中山身語正宗瀧光徳寺は、大正元年(1912)の開基で、初代住職の木原覚恵上人が「筑肥との間に古四国八十八ヶ所を開け」との仏告を得て、川底や、山中に埋まったままであった仏像の声を聞き、掘り起こしお祀りをしたことから、霊場開設が始まった。

札所は町外4ヶ所を除いて町内に点在している。信者は月に一回、墨染め衣の先達者を先頭に列をつくり、歩いて巡拝する。子どもから高齢者までが白装束に身を包み、杖を持ち野山を一行に歩く姿が見られる。どこよりも長くお参りされるのが^{きざん}基山の山頂にあるタマタマ石に祀られている84番札所である。ここは覚恵上人が辛い修行をなさったところで、そのご苦勞を推し量るかのよう、信者さんは地に座り一心不乱に祈る。吹雪の中に5、6人の修行者がその前に座り、雪に埋もれながらもわずかに動くこともなく読経をしている様を見ることもある。



写真 84番札所(タマタマ石)

【明治四国巡拝】

明治四国巡拝は、田代の昌元寺の「明治四国」参拝に関する石碑に「明治のある時期、肥前国三養基郡と筑後三井郡両地域の信者が、四国霊場から砂を持ってきて新たに「八十八ヶ所霊場」を開き「明治四国」と称し参拝していた。…」とあり、その名称の通り、明治の頃より始まったことが分かる。

札所は基山―鳥栖地域全域に広がっており、その数は昭和47年(1972)には136ヶ所、平成27年(2016)には110ヶ所と、高齢化などを理由に接待が出来ないなどの受け入れ側の状況変化で、札所の受け入れ先によってその年毎に増減する。札所となった仏様を擁する集落や、個人宅には事前に巡拝表が配られ、お接待の準備をして訪問を待っている。

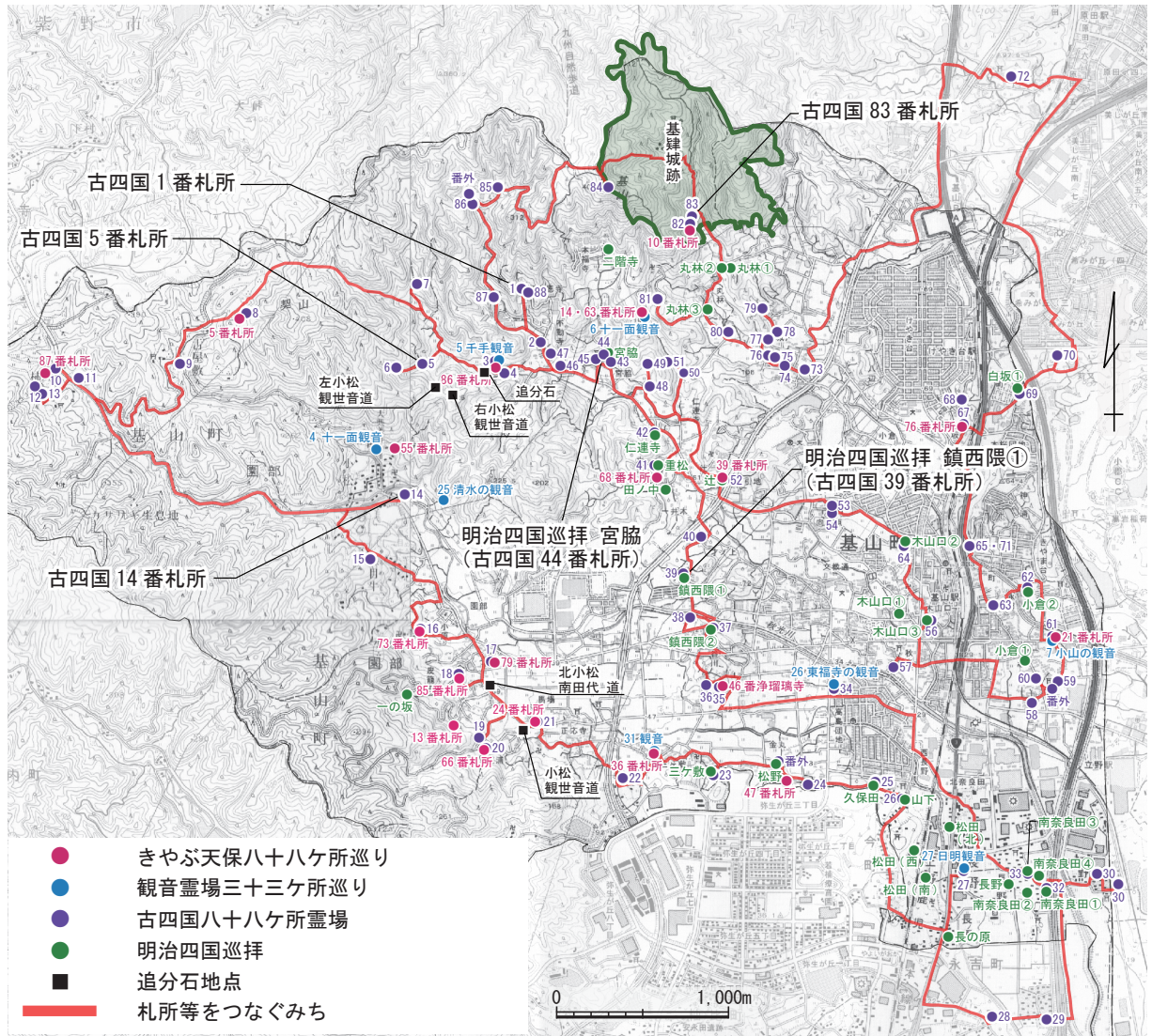


図 だろだろまいりの行程

イ) だろだろまいり

旧基肄養父郡の人々に「だろだろまいり」と総称される霊場巡礼も、催行者の時々の都合によって、巡る方法が異なっている。かつての姿、いわば徒歩による巡礼を継続しているのは、古四国八十八ヶ所で、巡拝は昔ながらに全行程を歩いてまわっている。一方、明治四国巡拝は、かつては歩きでまわっていたが、今では自動車に乗りあわせてのお参りとなっている。

【だろだろまいりの所作〈古四国八十八ヶ所霊場〉】

○出立

初夏の早朝午前7時20分、若葉に染まる瀧光徳寺の本山の駐車場。朝の冷たい風と寺内から流れる水の音が、信者さんを迎える。基山中腹の斜面を段状に平場をつくり、お寺の様々な施設が立つ。駐車場はその一番南にあり、基山への登山道路に面している。

次から次へと白装束を着た人が到着する。小学生ぐらいの孫を連れのおばあさん。女性一人。二人連れ。男性一人。腰の曲がったおばあさん。赤ちゃんを抱いた家族連れ。

皆さん山門で立ち止まり、本堂に向かって手を合わせ、一礼して、階段を上って行く。

その階段は100段はあろうか、両側を緑に覆われ、真っ直ぐに伸びている。

階段の真ん中には太い手すりがある。信者さんは階段の左側を上って行く。横を上って来られた信者さんに尋ねると、

「はい。左側を通ると決まっています。」

とのこと。途中の踊り場で皆さん右を向いてまた手を合わせる。右にお滝場があるからである。

階段を上ると、緑の銅板で葺かれたなだらかな屋根を持つ大きな本堂があり、その前に広場が広がる。その広場に本堂を背にして、「本隊」「町中」「念仏坂」「園部」「永吉」と黒々と書かれた札を持った人が前に立つ。それが一日目のコースを表していて、約200人の巡拝者は、自分の歩きたいコースを体調なども考慮して選び、その前に並ぶ。

午前7時45分に、半鐘が鳴らされる。出発の15分前に鳴らされ、仏様を勧請すると言う。僧侶が挨拶と、心得を言い、巡拝者が復唱する。「他人に迷惑をかける行動を慎む。」「係の人の指示に従う。」など5項目ある。

その後に読経。まず、「東日本大震災、熊本地震災害者供養のために」の前置きで般若心経があげられる。その後開経偈（読経に入る前に読まれる言葉）に始まり、般若心経、本尊宝号の「南無中山不動尊」。宗祖宝号「南無覚恵上人菩薩」そして「南無大師遍照金剛身」の御真言をそれぞれ7遍唱え、道中の安全と御同行の成就を祈願し、出発。本堂に向かって右側の列より歩みだす。「いってらっしゃい」と手を合わせた僧侶など（巡拝に参加しない）に見送られ、階段を下りて行く。

先頭は、巡拝の指導を行う先達が黒袈裟に輪袈裟を掛け、網代笠に地下足袋姿で颯爽と歩く。その後ろを錫杖を持った錫杖係（素手で錫杖を持つのは憚られるのか、白布で持つ所を包んでいる）が続き、列の前後を巡拝時の交通整理や健康管理など巡拝者のお世話をする2名の巡拝係で挟んで進む。



写真 階段中で東方に礼拝



写真 先達を先頭に出立



写真 荒穂神社へ礼拝

この、土日の2日間をかけて行われる古四国巡拝は、毎月一回行われている。特に固定はされておらず、お寺の1年間の行事に合わせて設定されている。

山門を下ると、各列がそれぞれのコースに分かれて進む。

○札所まわり

札所に着くと、行列最後尾の巡拝係が全員揃ったことを確かめて、「お願いします。」と言う。先達が錫杖を受け取り、一度振り鳴らし、読経を始める。その調子に合わせて巡拝係がカイタクと呼ばれる拍子木のような棒を打ち鳴らし全員で般若心経をあげる。読経が終わると、また錫杖が三度振られ、次の札所に歩き出す。歩き順は、最初に本堂前で並んだ順番が守られ、袋小路状態の狭い札所以外は、必ず先達さんが先頭である。賽銭は読経の前に入れる人、後に入れる人、入れない人とバラバラである。



写真 札所まわりの様子（荒穂神社旗立て石付近）



写真 札所まわりの様子（背後は基山^{きざん}）



写真 札所にて読経



写真 札所にて読経

途中の番外の「松野家」では、長く休憩をする。ここは、宗祖上人の弟が養子に行ったお家で、先達も我が家のようにニコニコして玄関の戸を開けて、土間の上り框に腰を掛けて家人と談笑する。外には、お接待の準備がなされ、お茶が台に置かれ、縁側にはお菓子も置かれている。町の一番南の小高い丘にある松野家からは、基山^{きざん}と麦秋^{ばくしゅう}の田が広がる町が一望でき、巡拝者は思い思いの格好でゆっくりと休憩をする。出発時には「シャリライ」と言うお経を読み、松野家先祖にお礼の意を表す。巡拝者はお接待の台に感謝の気持ちとして志^{こころざし}を置いていく。



写真 お接待の様子と品々



○午前10時20分

27番札所でいつも通りに般若心経があげられたが、覚恵上人が亡くなられた午前10時20分がくると西の御本山に向かって手を合わせ、「南無覚恵上人菩薩」と7遍唱和する。

○打ち終わり

一日のお勤めである16ヶ所の札所を打ち終えて、昼ごろ山門に到着。本堂前に並び、「^{ひざもと}膝下巡拝帳」と書かれた朱印帳に、朱印を押してもらう。朱印を押すのは、先達や巡拝係で首から朱印代を入れる袋を下げており、巡拝者はそれにお金(100円)を入れて押してもらっている。朱印帳を見せてもらうと、初めての人や、30週目の人、様々である。

皆さんすがすがしい顔をして、歩きとおした充足感を感じている様子。様々な苦しみや悩みを抱えた方もおられる。ただ健康の為と言う方もおられる。お一人で参加の男の方は、「歩いている時は、仏さまのことでしか考えなくてよいから良いです。帰る時車に乗ると、現実に戻ります。」と言う。「お上人の『呼べばこそ来れ 来ればこそ呼べ。』の言葉が好きです。」と言う女性。

先達五人が、一人を先頭に2列になって、錫杖を前にして、少し前のめりで立つ。巡拝者も朝のように並んで、無事に参拝が終わったお礼のお経が始まる。まず、「本尊宝号」、「宗祖宝号」「南無大師遍照金剛身」の御真言がそれぞれ7遍唱えられ、最後にお座文「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、さてもさてもかたじけない。古^{おんれい ごほうしゃ}四国巡拝…。御礼御報謝 身語正は一切 古四国巡拝なされし御同行の…」と先頭の先達お一人が腹の底から湧き上がるようになり声で唱え、古四国巡拝の一日が終わる。2日目も同様の所作で、異なる札所を周り、2日の行程が終了する。



写真 御本山へ唱和



写真 朱印の様子



写真 一日目の打ち終わり



写真 古四国八十八ヶ所霊場巡拝の様子

【どろどろまいりの所作〈明治四国巡拝〉】

○巡拝の日にち決め

明治四国巡拝は、毎年春と秋の二回行われる。巡拝の日にちは、巡拝の際にお大師さん(弘法大師)の人形を胸に抱いて歩く方を通称「お大師さん」と呼称し、このお大師さんとお世話人4~5人で決められる。このお大師さんは、誰もが務めることはできない大役である。

○順拝表とお札分け作業

順拝表とお札分けの作業は、この巡拝運営の中心の方々(以下「お世話人」とする)が巡拝の数日前に大昭寺(鳥栖)で行う。

順拝表とは、巡拝の日にちと札所名が記されたもので、毎年春と秋の二回作られる。この表は、巡拝者にとっては日程表であり、札所を持ち、巡拝者を迎える側の個人宅や、集落にとっては、○日の○時頃に巡拝の一行が訪れることを知らせる役目を果たしている。「お世話人」は、この順拝表を手分けして、前もって札所に配る。

お札とは、「奉納明治四国八十八ヶ所霊場巡拝」と書かれた納め札である。納め札とは、巡拝者が記

念や、祈願のために納める札のことで、この巡拝時にもお参りの後にそのお札が札所の祠や家に納められる。そのお札を日にち別に分ける作業をする。

南無大師遍照金剛	外陣宿八真真今藤藤石如佐小上久波長緒下緒吉松羽慈大	十六日(月)	第一日	平成三十年四月春季明治四国順拝表 [毎日八時三十分打始め 八時三十分出 発]
	町田内町坂木木(北)(南)泉事下家寺家輪賀川元光家迫家宅家館仏屋家寺寺	十七日(火)	第二日	
	桑戸竹養黒大松曾松六酒高日横松南	十八日(水)	第三日	
	木野父田食光雪家井尾寺枕田奈	十九日(木)	第四日	
	添渡家音家楠院家宅宅宅宅	二十日(金)	第五日	
南無大師遍照金剛	一鈴辻田重宮瀧仁二丸白小秋松三	二十一日(土)	第六日	平成三十年四月春季明治四国順拝表 [毎日八時三十分打始め 八時三十分出 発]
	のノ松食光連階林倉山口野ケ	二十二日(日)	第七日	
	坂町中宅脇寺寺寺②坂②③光家敷	二十三日(月)	第八日	
	今久山松松松長東柚平牛山城磯河万上八門山	二十四日(火)	第九日	
	町保田田田田の公園比原原桜博く荻斧中北赤太田昌不	二十五日(水)	第十日	
南無大師遍照金剛	藤田昌中姫前上観松酒西下松田桜博く荻斧中北赤太田昌不	二十六日(木)	第十一日	平成三十年四月春季明治四国順拝表 [毎日八時三十分打始め 八時三十分出 発]
	島島町村方間原世井依原代町食物すり野農地坂東町山	二十七日(金)	第十二日	
	家家③家舎家②音尾家家原②前②館④宅園蔵②③④山	二十八日(土)	第十三日	
		二十九日(日)	第十四日	
		三十日(月)	第十五日	

資料 順拝表 平成30年(2018)

○お大師さま

お大師さまの人形は、背丈20cmぐらいのもので、一番下に引き出しが付いたガラスのケースに入っている。このお大師さまは大昭寺の本堂に預けてある。大昭寺が打ち始め(巡拝初日の出発日)の時はそこからお大師さまを抱いていくが、別の札所が打ち始めの時は、先達さん(巡拝の指導者)が前日にお大師さまを取りに行き、自分の家の床の間に安置し、翌朝はお茶とお仏飯を供える。(お大師さまを抱いて歩く姿は「お大師さん」と呼ばれている。)



写真 お大師さま



写真 お大師さん(お大師さまを抱く方)



○打ち始めの作法

その日の打ち始めの札所に集合し、朝の挨拶をして、先達さんより「今日も事故のないように…」などと注意をもらう。お大師さんの箱の引き出しにお賽銭を入れて、拝む。

○札所での作法

先達さん、旗持ちさん（「明治四国巡拝」の文字が書かれた旗を持って、一行を先導する人）、お大師さんを先頭に札所前に並び、ろうそく、線香をつける。

明治四国のどろどろまいりは、おおむね下記の順で列をなし各札所まで歩いていく。

先達さんを先頭に、先達さん→旗持ちさん→お大師さん→巡拝者（年配者から順）の順で巡拝する。このうちの二人が、ろうそくや線香を点ける所作を率先して行う。その後お賽銭を各自で入れる。先達が般若心経の始まりを唱え、木魚担当がその調子に合わせて叩き、それに合わせて皆で般若心経を唱和する。読経の後、「南無大師遍照金剛」の御真言を唱え、先達さんが『奉納明治四国八十八ヶ所霊場巡拝』と書かれた納め札をお礼に祠内に置く。札所の方からお接待でお茶をご馳走になったり、お菓子やマッチが入った袋をいただいたりする。



写真 打ち始め



写真 出立

かつては日が暮れると、その日の打ち留めの札所がある集落の家を宿にしていたとも聞く。嫁いだばかりの昭和46年(1971)頃にそのお世話をした永田集落の方は、

「4、5人の方が泊まっていました。宿になることをおばあちゃんがとても喜んで、夕飯をお出しして、熱心に行者さんの話を聞いていました。泊まって頂けることが名誉なことだったようです。」

と語ってくれる。今は巡拝者が車で移動するため、泊まることはないで永田集落で祀る札所の前で巡拝者を迎え、お茶やお菓子で接待したり、近所の人々と、このどろどろまいりに参加している。

明治四国巡拝のお世話をしている方からは、

「こんなん若かのがつんの一てきてくれるけん助かります(こんな若い人たちが、たくさん集まってきてくれるので助かります)。このお世話役ば譲ろうと思おとりますけん(このお世話役を、若い方々に譲ろうと思っています)。」

と次世代に渡せる安堵感を顔いっぱい表しながら話してくれた。

この他、三ヶ敷集落では、巡拝者は、弘法大師が祀られている小さなお堂の前に一列に並び、先達の声に合わせて般若心経をあげ、御真言を唱える。

お参りが済むと、札所のお世話をしている人々からお茶やお菓子のお接待を受けるが、ここではお昼ご飯も用意されていたので、先頭を歩く女性に抱かれていた弘法大師像は下ろされて祠内に安置され、お茶とご飯が供えられる。お大師さんも一時の休憩である。敷かれたゴザの上にはテーブルが置かれ、御馳走が並ぶ。季節柄、筍の煮物にお漬物、落や蓮根などの季節の野菜に厚揚げのお煮しめ、炊き込



写真 巡拝の様子



写真 お接待の料理



写真 お接待の品(左にマッチ箱がみえる)

みで飯などが用意され振る舞われる。どれも三ヶ敷の人々の心がこもった手作りで、巡拝者はありがたく頂き、疲れを癒す。

先達の一人が、

「このお参りの時は四足(牛や豚などの肉を食すこと)を絶って精進します。春は花を愛で、秋は紅葉を楽しみ、忙しい毎日の心の糧となればと思います。宗派は問わず、素朴な気持ちでかけひきなして、たまには雨に打たれれば、天気になってその有難さが分かるものです。金で買えない喜び。しかめっつらの顔の人も、お大師さん参りのこととお訪ねすると、ころっと人が変わる。そして優しい言葉で語りかけてもらう。これが幸せ。」

と話す。参加者はそれぞれ先祖や両親の供養、家族の無病息災を祈り心の平安を求めて巡拝する。

暫く休憩した後、立ち上がり、出発の用意を始めると、1人ずつ袋に入ったお菓子も配られる。その中には必ずマッチが入っているが、このマッチなら火事にならないという言い伝えがある。

白装束の姿が一行になり丘陵を下りていく。青々とした麦畑にヒバリが甲高く鳴きながら上下に飛ぶ風景を背に、その姿を見送る。

巡拝者を見送った後、三ヶ敷の人々もやれやれとゴザに座る。

「私も子どもの頃はどろどろまいりに付いていきよりました。おせんべいやお菓子をもらうのが楽しみやったけんですね。」

お茶を飲みながらひとしきり昔話に花が咲く。そのお顔には晴れ晴れとしたご様子も見受けられ、自分の代わりに巡拝するお遍路さんにお接待をすることで分けて頂いたご利益を感じているかのようである。



写真 札所での読経



写真 お接待の様子



写真 お接待の品



○打ち終わり

先達さんの「今日も無事に終わり…」と言葉をもらい、解散する。

(3) おわりに

お遍路さんが白装束に身にまとい、広々とした春や秋の空の下、自然が豊かに残る本町の野山や田畑の間を一行に並んで歩く。この長年続けられてきた「どろどろまいり」の風景は、町民にとって馴染み深いものであるが、その姿に出会うたびに、誰もが心の居ずまいを正すような気がする。また、遍路を終え、接待する人々にとっても、季節や年月の移ろいを感じつつ、力を合わせて接待の準備をする事で、神仏や人のつながりを認識する。白装束を身にまとい、田畑の中の道を歩き江戸から明治に建立された仏様を祀る札所をまわるお遍路の姿と、それをお接待する人々が織りなす風情は、春、秋の訪れを町民に感じさせる歴史的風致を形づくっている。

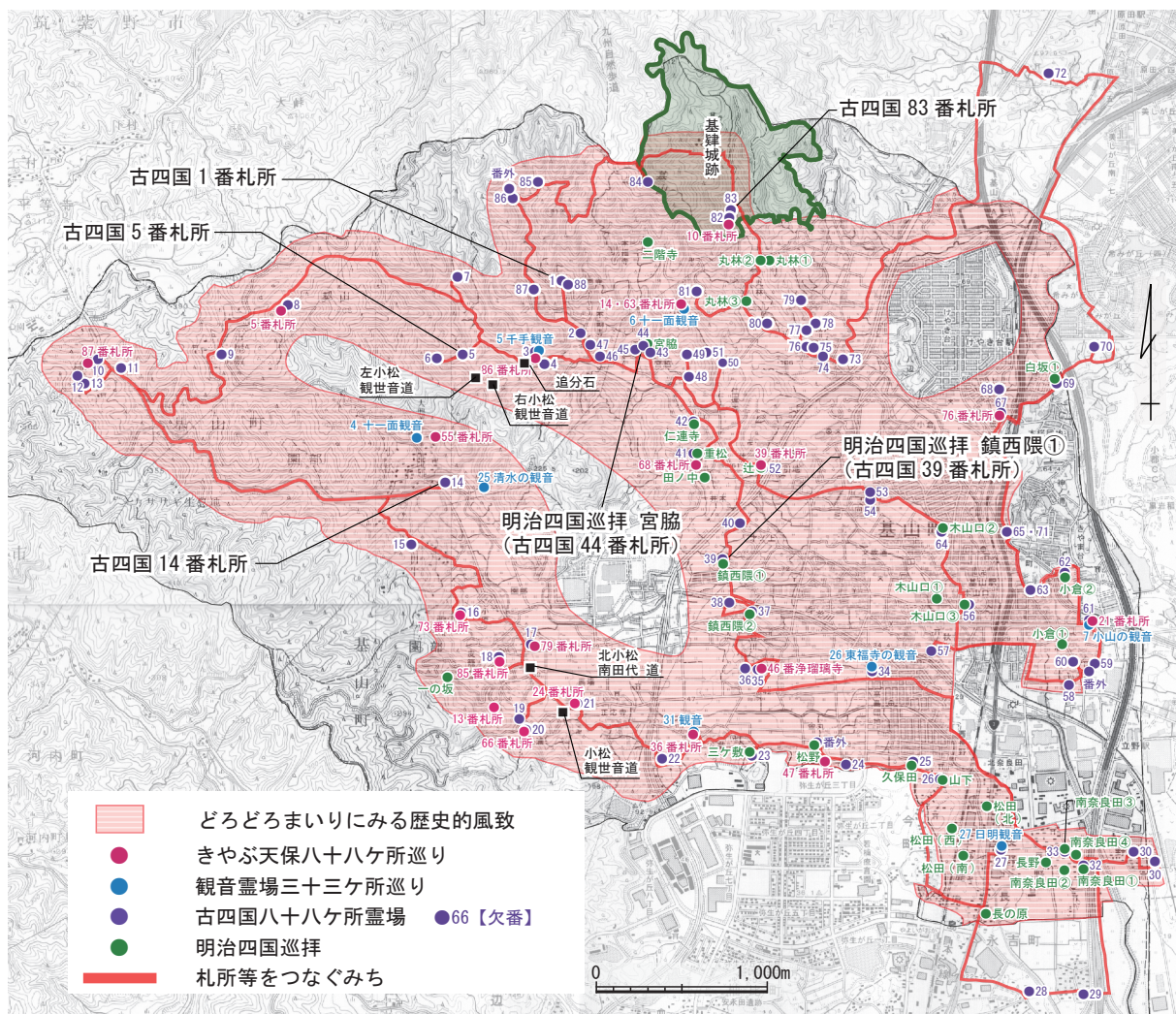


図 だろだろまいりにみる歴史的風致

【コラム】どろどろまいりと内信心

「佐賀県北東部の小さな町にも隠れ念仏が残る。」と、作家五木寛之が書いている（※1）。

この隠れ念仏とは、本町で江戸時代の頃から続けられている民衆真宗、「新後生(後には新後世)」で行われる念仏のことである。この信心を「寺信心」に対して「内信心」という（※2）。江戸時代の寺檀制度の陰で、寺僧抜きで在家同士が集まって信心を深めてきたもので、真宗集団からは、異端・異安心とされる秘事法門のひとつである。江戸時代には何度も弾圧を受け、明治に入り、寺請制度が消滅し信仰の自由の波も押し寄せてつつあったが、明治9年には新後生の先達の天本茂左衛門が警察に連行され厳しい取調を受けている。免許なく「新後生」という一宗を開き数千人を帰依させているのは政府にとって脅威であったようである。このように幾度となく辛い目に遭いながらもこの信仰は守られてきた。この信仰の仲間に入るには、入信、成就の行を受ける。その行は、「ホウゾウ」と呼ばれる行場に入り、「助け給え」を大声で連呼して、阿弥陀如来の救済にあずかる。つまり、命の終わりを待たずして浄土往来が約束され、新しい後生が開ける。この信仰の心を温める為に、今でも村供養、先祖供養、天神さん供養などの様々な供養時に、隣組や組合、時には町内外単位で集まり、念仏を唱えている。その集まりを以前は公には出来ず、ひそやかに夜集まり行っていたので、「お茶沸かし」と言い、「〇〇日に、お茶飲みに来てくれなさい。」とその時の宿(座元)が一軒々々を訪れ案内して回った。今でもその名残りが残り、そう伝える所もあると聞く。その座に集まるのは、普通一軒から一人で、主に主婦である。その座に呼ばれ、リーダーを務めるのが、信心練達した「お客人」と呼ばれる人である。このお客人が音頭をとり、仏前(宿元の仏壇の前)で「三遍返しの長念仏」を読経し、信心を喜ぶと同時に、お参りを口実に集うことで地域共同体の繋がりを保っている。

人口1万7千人の本町に14ヶ寺があり、その中の瀧光徳寺、本福寺、二階寺、青龍寺、吉祥寺の5ヶ寺が、新後生と真言宗、天台宗が習合して生まれた派生習合寺院である。

また、信心仲間で建立した説教場から寺となった明光寺と善覚寺もある。このように本町に寺が多いことも、内信心が行われていた理由のひとつと考えられている。

そして「どろどろまいり」が長きに亘り続けられ、それが支えられ続けられてきたのも、この信仰の心が根付いているからだと考えられている。

※1 五木寛之(2002)『日本人のこころ 6』(株)講談社 pp307 東京

※2 長 忠生(1999)『内信心念仏考』海鳥社 pp261 福岡